

「山岳会」を考える ②

山ガールに引っ張られてか、若い人ばかりでなく中高年者も含めて登山者が増えている。登山者の増加は喜ばしいことだが、山岳遭難事故の増加という問題を招来している。しかもその事故内容が、「道迷い」とか「一般登山道での転倒滑落」という、ぼくらが現役の頃には考えられない遭難事故である。

ちょっと考えてみると、彼らの山に登るきっかけがマスコミの喧伝であり、次のステップへの情報収集がインターネットという現状で、生のアドバイスを受けていないのだから、自立した登山者が育ちようもないし、登山の危険も実感のしようがあるまい、と思う。前号の繰り返しになるが、「先日、西穂で遭難した若者は初めての雪山だったという。つくづく雪山の魅力と怖さを同時に伝える難しさを思う。ガイド記事で『強風に注意』と書いたところで、結局、活字はその危険をリアルには伝えられない。現場で本当に必要な技術を伝達するには、やはり山岳会の復興に期待するしかない」と、大畑さんは書いている。

昔のような山岳会が復興していて、その会に西穂の彼が入会していて、「この冬、西穂に登ります」という計画を出したら、即、計画は却下されたであろう。西穂は初めての雪山として計画する山ではない。そんな登山の常識ですら、インターネットでは伝えられないのだ。登山の危険は、体温のない媒体からでは伝わらない。生身の人間関係からでないと伝わらないのだ。登山の危険を知るところに、登山者としての自立がある。山岳会の復興には、現代社会では消滅している「生身の人間関係」の復権がベースとなる。で、あるとしたら、山岳会の復興はかなり悲観的にならざるを得ない。

ヒマラヤの極地（包囲）法登山のため、「自前のサポート要員を育成する。それが当時の山岳会の新人教育の目的だったのではないか」と前号で書いた。いまやアルパインスタイルで、サポート要員を必要としないのだから、先輩は新人に技術を伝達する必要はない。新人の側は生身の人間関係をスポイルするのだから、山岳会が成立するはずがない。

じゃあ、どうする…。正月の遭難に続いて、似たような遭難事故がゴールデンウィークにも発生している。「自立した登山者の育成」をどうする、「登山の危険」をどうやって認知して貰う…。山岳会の復興は期待できないにしても、山岳会に替わる、生身の人間関係が成立する場の構築は必要だろう。生身の人間関係が成立する場って、山岳会のユルユル版かな…？

いまのニッポン、元気がない。誰も彼もがどうでもいい情報で頭がいっぱいだからだ。ニッポンの元気を取り戻すには、みんなの頭を一度カラッポにする必要がある。頭を空にする最良の方法は、山に登ること。で、一億二千万人総登山者化計画を考えた。計画推進のためにも、生身の人間関係が成立する場の構築を迫られてはいる。